

## 世界記憶遺産「画文集：炭鉱に生きる」を目にして

今年の5月に、山本作兵衛氏（1892～1984）の炭坑記録絵画や日記、メモ等計697点の作品群がユネスコの世界記憶遺産に登録されたことは、記憶に新しい。

世界記憶遺産に関しては、先に「世界遺産：記憶の遺産・アウシュビッツ、広島」を見て（HP「雑学BN」のマスコミ等コメント関係（IV）、2008.04.01.：参照）で触れたことがある。

個人のもものとして世界記憶遺産に登録されているものとしては、「ベートーヴェン交響曲第9番の直筆楽譜」、「アンネの日記」等が有名であるが、日本人のものとして初めて山本氏の作品群が認められたことは、凄い！。

この作品群が世界記憶遺産に登録されたので、「画文集：炭鉱（ヤマ）に生きる 地の底の人生記録」が新装版で復刻されたことを知り手にした（初版：1967.）。

氏は、8才の頃から鉱内に入り、以後50数年間、明治、大正、昭和の時代を筑豊炭田の各炭坑を渡り歩いたとか。

エネルギーが石炭から石油に変わる昭和30年代に炭鉱は次第に閉山となり、60代半ばの氏は閉山した炭鉱の資材監視の夜警をしていたが「夜は長うて退屈」なので「気を紛らわせるために、昔のヤマの有様を描いて子孫の語り草に残しておくのも一興かと思い」、正確に描くことを心懸けて「一枚また一枚と描き重ねた」ものが、この作品群となったようである。

世界記憶遺産に登録の報道でそのスケッチは目にした方も多と思うが、スケッチで描き切れないことは、絵の余白にびっしりと文字で書かれている。まず、60代半ばにして詳細に思い出すこの記憶力の凄さに圧倒される。

明治維新以降、近代国家を追い求めてきた陰で、労働条件とか人権保護等といったものが皆無だった炭鉱の有様や坑夫の生き様が、正確さを心懸け、子孫の語り草に残せばとの思いから描かれているだけに、世界の人々が世界記憶遺産に相応しいと認めたのだろうなあと考えた。

今の日本という国家の生い立ちを理解するためにも、この画文集（記憶遺産）を目にされてはいかがですか。

追伸：

今月半ばにスケッチブックの一冊目と思われるものが、ある炭鉱の主の遺品から発見されたとの報道があった。